

第6回新たな「国土のグランドデザイン」構築に関する

有識者懇談会における主な意見

- 冒頭、事務局より資料2について説明。
 - 続いて、事務局より資料3について説明。
 - ・ 全体的に異論はなく、理念にあるように、ほどよい成長は必要、先進国らしい安定感のある社会をつくるというのはそのとおりだと思う。そのためには、さらにいくつか強調すべきポイントがある。まず、成長のためには大都市圏が輸出を牽引してきたという経緯があり、これは当分続くので、大都市圏の国際競争力の強化が必要。リニアによるメガリージョンについては、関東、中部、近畿、北陸がひとつになったとき、国土形成計画の広域地方圏としての中国、四国、東北の役割をどうするのか、また、メガリージョンの中でどのような機能分担が起こっていくのかも考えていかなければならない。地域力の強化については、新たな公も含めてかなり丁寧に書いてあり共感する。人口減少については、悲観的な予測ばかりではなく「子供が生まれる社会をつくろうよ」というニュアンスが少しずつ出てきており、これは非常に良いと思う。少子化対策については、基本戦略で大都市も地方もともに重要としているが、これはやはり大都市圏が重要だと思う。名古屋郊外では、三世帯同居、職住近接などにより出生率が高く、首都圏でも参考になる。国土計画において、「国土の均衡ある発展」という言葉は半世紀にわたり生きてきているが、これは、とりもなおさず、都市は都市、地方は地方で、様々な解釈を許してきたということでもある。今や何を意味するのかわからないということも一部には出てきているのではないか。この言葉に、今度はどのような意味を与えていくのかという議論が必要。
 - ・ 全体を通じて、5全総や国土形成計画と比べて、ネーミングだけを変えて中身が変わっていないものが多い気がする。細かなところで新たな表現を工夫しても仕方が無く、大きな柱で新しいことを言うべき。例えば前回の委員プレゼンであったようないわば「農村の逆襲」、また、二つ目は具体策を伴った日本海側の位置づけ、三つ目は首都圏の再構築。首都圏はオリンピックや三環状、空港等様々な状況変化がある中、大都市の中の一つとして扱うのではなく、特出しして記述すべき。四つ目は新たな技術社会、そして最後に、メガリージョン。ただし、メガリージョンについて言えば、リニアは東海道新幹線のリプレースメントで、このエリアにはどんなチャンスがあって何が起こるのか十分に明らかになっていない。そこに確信のある太いコンテンツがなければ、ネーミングだけに終わってしまう。
- 各論で2点述べたい。まず、具体的推進方策の中で、「既存の社会システムを技術にあわせる改革を進める」とあるが、これは違和感がある。技術開発や情報化社会のネガティブな影響やリスクに世の中の関心が高い中であっては、このような表現ではないと思う。「制度と技術を一体的につくり上げる」とか「真のニーズを踏まえた技術社会をつ

くる」ということではないか。

次に、「我が国は構造物インフラの上に高度稠密な産業社会が築いた初めての国」という表現は理解できない。ニューヨーク、パリ、ロンドンもインフラ整備を積み重ねてきており、日本を買いかぶり過ぎている表現。どうしてもこだわるなら、「急峻な地形や災害も多い日本は構造物を多用せざるを得ず、かつ丁寧な構造が必要で、その苦しさを乗り越えてきたのが我が国」などとすべき。

- 様々な要素がうまくまとまっており良いと思うが、各委員からいくつかの違和感が出る理由は、この骨子が、国土のことしか書いていないからではないか。産業構造の変化や国際競争など、一体この国はどうやって稼いでいくのかということが触れていない。そこが無く戦略が出てくるので違和感がある。そこで参考になるのが、国が衰退しかかり復活した事例としてのオランダ。80年代にECにスペインとポルトガルが加入してオランダの農業は大きな影響を受けた。その後様々な対策を打ち、農家戸数が半減するなか、農地の集約化とともに、ITによるスマートアグリを導入した。現在オランダの農産品の輸出額は773億ドルで米国に次いで世界第2位。これは、国土づくりの目的として農業振興を位置づけたからできたこと。骨子（案）は、人口減少等は捉えているが、産業政策が書いていない。国土のグランドデザインで産業論がどこまで書けるかというはあるが、少なくとも産業から独立しては語れない。

また、水道、道路、電力、鉄道等のインフラ輸出も重要。最初から海外に売るつもりでインフラパッケージを検討すべき。前述のオランダは、スマートアグリショールームを開設し、各国関係者を招待し、システムをまるごと販売している。日本でも輸出版売を意識してインフラシステムを開発し戦略として位置づけるべき。

- 大きな2つの論点と各論3点を述べたい。大きな論点として、拠点とネットワークの考え方には賛成。事務局説明にあった人口メッシュのマップで印象的なのは、都市がばらけているということ。極端に言えば、2050年は都市、農村という区分がなくなる社会だという議論ができ、都市も農村も拠点とネットワークという同じ処方箋となる。そして東京の多自然化と出生率の向上。ばらける都市のなかで、東京をどう改造していくかという論点を積極的に出すべき。次の論点は理念について。(2)でいわば成長する国土を書いてあるが、むしろ「安定的な国土」、「安心できる国土」ということが優先すべきで、そのために一定の成長が必要という理論が必要。各論で言えば、地球に優しい、環境に優しい、低炭素社会等の記述がほとんど無いがこれも重要。また、2050年に定住人口、交流人口の先にある「協働人口」という概念を入れるべき。これにより新たな公の2段ロケットの位置づけも明確になる。また、具体的施策のネットワークの進化には交通のみの記述しかないが、後段に技術開発の項があるとはいえ、分散の不経済をネットワークに乗り越えるというところなので、やはりここでは交通とともに情報ネットワークも記述すべき。

- 遠隔医療が発達しロボット手術が普及すれば、どこにでも病院が必要という常識が

変わり、都市形態も変わる可能性がある。教育も同様。情報通信の発展はやはりインパクトが大きく、ネットワークには情報も記述すべき。

- ・ 委員が語っているポイント・キーワードを並べると、こういうレポートになるのかなという印象。もっともに気になるのは、3年連続貿易収支が赤字、円安にしても改善されず、経常収支も4ヶ月赤字になる中で、どういう産業構造で日本という国を成り立たせていくのかということ、を国土的視点から捉えなおしたときに、どうなのかということ。

日本はこれまで工業生産で外貨を稼ぐ一方で、食料は海外から買ってくるという国際分業論にたち国づくりを進めてきたが、これからはそうでもないのではないか。食料の輸出を1兆円にのせ、海外からの輸入を4兆円にまで落とすと、日本の産業構造は安定化する。そういう問題意識を持って、農業生産法人のような仕組みを地方に定着させて耕作放棄地を活用することで、日本の国土をこう変えていく、というような戦略が見えれば、資料2の1000人に移住10人ということも腑に落ちる。

また、居住地の6割以上の地域で人口が半減以下になるという説明があったが、これから計画される道路網や総合交通体系を人口減少の図面の上に埋め込み、人口減少にどのように国土が向き合っていくのか、ということをしかりと構想し、書き込んでいく必要がある。

4ポツの国土像では大都市圏、地方都市圏、多自然生活圏域それぞれ可能性があるとまとめようとしているが、これからは広域ブロックを戦略的・多次元に考えていかなければならない。スーパーメガリージョン以外の地域をどうするか、それぞれの広域ブロックがどういう機能、役割を担うのか。例えば、東北ブロックを考えたときに、震災があり、人口が増加する見込みがない地域をどうしていくかという議論もあるが、首都機能の分散という視点を入れて、首都圏を支えるといったような夢のあるファンクションを持たせて、産業論を埋め込んだ東北ブロックという考え方であるとか、行政区画にとらわれた道州制ではなく、日本海側の県なり地域が力を合わせて主体的、競争的に国土軸のグランドデザインを描くことにより、それがやがて行政ブロックになっていくかもしれない。また、中央リアの開通により、浜松から飯田にかけての地域は、また別の形でのとらえ方をしなければならない。大都市圏、地方都市圏、多自然生活圏域といったような一つの横軸では表現できない、別のとらえ方からの広域ブロックが、競合しながら刺激し合いながら、新しい国土に対する考え方を誘発していくというような流れをつくるべきときにきている。今のままでは非常に平板的に見える。

自ずと力のある地域が新しいリーダーになっていくような、緊張感のある目指すべき国土の姿を描くというのが、思想的には正しいのではないか。その中で逃げて欲しくないのは、道州制の議論。それから首都機能の分散。

- ・ 計画を立てて計画通りに産業をつくっていく時代ではない。民の力を誘発・創発させるようなグランドデザインでなくてはならない。具体的推進方策に魅力があまりない。理念に、「長い歴史の中で育んできた『多様性』を重視し、これにさらに磨きをかけ

ていくことが重要」と書いているが、多様性は重要であるが、日本人は全く多様ではない。新たな、21世紀の価値観を持った多様性に進化させないといけない。

国土の姿で示されている地方都市圏域の部分は、地方の首長が何かやろう、という気になるような書き方にすることが必要。地方の多様性は必要であるが、これではそうは見えない。広域ブロックから小さな拠点までそれぞれはつながっており、このA3の資料は大変いいと思っているが、それぞれの地域が目指すべき姿をイメージできる書き方にしなければならない。

具体的推進方策のところ、移動と交流を進化させるといったときに、地方の観光は多様ではない。世界中のお金持ちを呼び込むような観光地を作ってもいい。ヘリコプターやプライベートジェットだとか外国人の大金持ちが気軽に入ってこれるような、そういうことを意識した通関・入国の仕組みや空港のヘリポートの整備のあり方とか、大胆なことを記述する必要がある。

インフラを賢く、長く使うということが書いてあるが、これまで作ってきたインフラだけでなく、新しく整備するインフラについても長く賢く使えるようにすることが必要。

コミュニティ再生のところは、三世帯同居とか近居だけではなく、血縁関係なく同居であるとか、新しいコミュニティの形も視野に入れる必要がある。

国土・地域を守る担い手のところでは、大企業を退職された方で優秀な方は多数いる。こうした方はベンチャーや中小企業バックオフィスの対応等、いろいろなことができる可能性がある。そういった中で、全国各地に起業インフラのオフィスをつくりますとか、見た瞬間にビジネスになりそうだ、と思うことを書いてほしい。

- ・ 理念のところの「一定の成長は必要」という書きぶりでは、そうですね、としかいえない。産業界自らが変革を促されるような理念を出してほしい。

10ページのところに「自動車交通を抑制し、公共交通、自転車利用」とあるが、交通政策基本法では交通手段のベストミックスが必要とされており、書きぶりを考えて欲しい。外国人でも分かりやすい案内版の表示や自転車でも走りやすい道路の整備など、インフラをきっちり整備してやれば、自ずと自動車の利用は下がってくる。そういう姿をつくるべきである。

「人が住み続ける以上最低限の道路が必要」という書き方も、誤解を受ける。住んでいる限り整備を続けると受け取られるよりも、人口の動態やこれからの都市がどうなるのか、国土を管理するための農道・林道はどうあるべきかなど、総合的に判断した上で道路を確保していくということではないか。

- ・ 最後の具体的推進方策がインパクトを感じさせない。時代の潮流と具体的推進方策が繋がっていない。特に少子化については、重要なテーマ。前面に出す必要。

グローバル化についてもあまり書かれていないという印象。観光客や移住してくる人も増えると思うが、どう共生していくのかという視点がない。

地球環境やエネルギーについても、それぞれ項をおこして対応する必要がある。

国土計画については、現在実行力を問われている。予定調和的に将来の国土の姿を客観的に描いているのか、あるいは政策を打ってこういう方向に持って行こうとしているのか、特に後者が重要と思うが、その視点が見えない。政策的に何ができるのか、ということをしちんと整理する必要がある。

- 国土形成計画と比較し、新しい点がどこにあるのか、「はじめに」や「まとめ」でもいいがはっきりと示した方がいい。13ページに山林のことにも触れているが、水や山林を守ることが非常に重要。

14ページのインフラを賢く使うという部分は、「インフラの特性に留意するとともに、管理レベルを考慮し・・・」とあるが、道路なのか鉄道なのか主語が何なのか想定しにくい。

- 決定的に抜けているのは、福島。30年から50年かけて復興していかななくてはならないという中で、グランドデザインで全く触れていないのは致命的。復興もしっかり考えているという点を示しつつ、日本全国に共通するような人口減少等の問題を取り上げていくべき。

また、どれが新しいのか、どれが方向転換しているのか、同じことを書いているのか、色分けして新しいところのクローズアップをするべき。

以上